

會

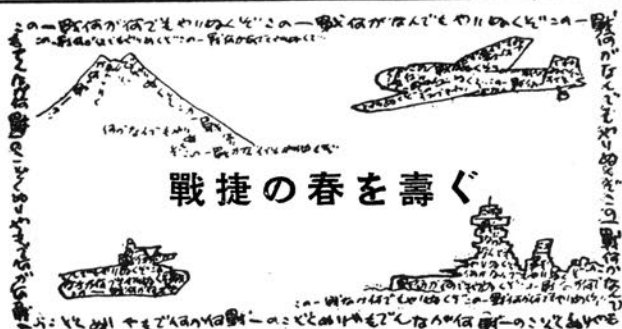


報

昭和17年1月

113

日本山岳會



戦捷の春を壽ぐ

目次

決戦下の登山道	山田奈良雄	1
日本の背負囊	磯貝 勇	2
圖書紹介(極地集誌、山湖隨筆、The Everlasting Hills)		4
餘白雜題	諏訪多榮藏	6
會員通信、山岳部欄		6
會務報告		7

決戦下の登山道

山田 奈良雄

高い峰、険しい山に憧れる心はアルピニズムの極致である。洋の東西とを問はずアルピニズムの根源は同一である。日本の民俗によつて日本の地に生れた古來からの登高精神を中心とした山登りの形式と、歐風アルピニズムが日本の民俗に消化されて日本の地に馴化された日本式アルピニズムを中心とした山登りの形式があるが、それは單なる形式の相異にしかすぎず、ともにその根幹となる精神は全く同一であるべき筈である。

だが批判能力に缺陷のある人達によつて歐洲直輸入の登山形式を以つて至高のものとする誤られたアルピニズムが時局に影響されて批判の対象としてとりあげられてあるが、こゝに再び、その形式だけを検討しようとする誤謬が繰り返へされてゐないならば幸である。輸送能力と物資が國策遂行のために動員されて生活面に於てさへ不自由を忍ばねばならない時代にそれらの輸送力と物資を濫費するが如き山登りは慎しまねばならない。それがひいては高度の登高精神を必要としないやうな山のみに山登りの対象が限定されることも

あらう。これは決戦下なるが故に國民として忍ばねばならないことである。だが、かゝる安易なる山旅に精神を墮落させることは好ましいことではない。私達は國民として思ふべき心の山に登り得ないことも忍ばねばならないが、安逸なる山登りに墮眠をむさぼるべきときではない。山登りの形式は國策に協力して思ふ所を得なくとも、その精神は常にアルピニズムの極致を追及してやまないのが立派な皇國の山岳家である。身は杖一笠をまとひ裏山の小徑を歩むとも心は常に高きを持つのが眞の山岳家であり、時局の急迫と共に山に登ることさへ許されなくなれば、陋屋に身を置きながら、なほも心に貴き登高精神を追求めてやまないのが眞の山岳家である。

のみを強調して、その全面を忘却することがありはしないだらうか。

登山が歩行力や體力の増進に役立つからと言つて、單に登山をしたことだけで十分に國家の役にでも立つたやうな氣持になつてしまつて、農産物を荒らしたり、交通道徳を蹂躪したりするやうでは、ラザロ體操でもするか、馳足行進でもしてゐる方が、よつほど結構だ。

登山には登山でなければ得られないものがある筈である。單に體位向上のみならば登山以外の方法が幾らでもある。

馳走行進と何等選ぶ所のないやうな團體強行登山が近時の流行になつてきたやうである。もちろんこれは登山とは違つた意味に於て結構なことであり、國民鍊成上上必要なものではない。そして強行力を持った登山人が國民鍊成のために、これらを指導することは強行力といふ特殊能力を持った登山人としての任務ではあるが、登山人が、このことのみを以つて能事終れりとすることは賛成し難いのである。

かく言ふ私自身、私の關係する山岳團體では集團強行登山も行ひ鍊成會も行つてきたのである。私は理窟ばかりが先に立つて、

他人のやることを批判ばかりする人間ではないつもりである。すでに決戦下の登山人として、その特殊技能を役立てなければならないときには役立てゝきたつもりである。

先づ新體制は實行が先に立たなくてはならない今日、すでに議論の時代ではなく、實行の時代である。登山界のみならず今日の社會の狀況は決して眞の新體制に移行を待つたのではない。時局に阿諛追従して美名の下に隠れて自己のみの利益を計る徒輩も多いが、一方この過渡期的な諸現象を眺めてすでに新體制に移つたかの如く誤認して知識階級や上層部に擬似新體制を嫌ふの餘り眞の新體制を理解しようしない人達も多い。

登山界でも一方には時局に媚び形式のみに流れて崇高な登山精神が忘却されようとしてゐる反面、新しい形式が生れようとするのを白眼視して、あへて理由のない反對を稱へばおさまらない人達もある。

時代は各人が好むと好まぬにかゝらず移つて行くのである。その時代に生を享けた一員ならば、一刻も早くこの過渡期を終へて新しい磐石の時代を迎へることに協力しなくてはならない。

時局に阿諛追従する者も白眼視する者も共に眞性新體制に對して

の敵性人物である。

アルビニズムの極致は、いつの時代になつても常に同じことである。誤られたアルビニズムがその時代に清算されることは幸ではあるが、アルビニズムの形式のみが論じられてゐることは愚である。

先づ手につけられることから實行してみても後、漸進的にアルビニズムの極致を追求してやまぬ精神こそ、いつの時代に於ても必要であるが今日の時代に於て、それは一層必要なことではなからうか。山へ登ることが許される間は私達は確固たる信念の下に登山精神の大旗の下に、正々堂々と山に登らう。そして、山に登ることさへ許されなくなつたなら、山へ登ることをやめよう。そしてかつての日に得た登山精神を祖國の役に立てよう。美名の下に隠れて、自分だけが山を樂しまうといふやうな卑怯な眞似は、やめようではないか。

圖書室 開室時間

日、水、金 12—20時
火、木、土 12—17時

日曜・祭日は閉室、
精々御來室の程希望致し
ます。

日本の背負囊

山の民具、其の二

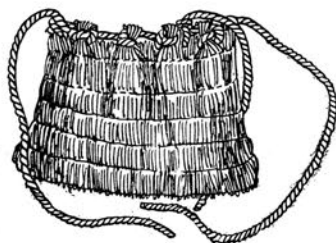
磯貝 勇

私はつと以前の（此の會報第65號、昭和12年4月）に「山の民具」なる一文を載せ、「山登りといふ行為を仕遂げるために日本の山人達が古くから使用し來つた民具は、一見卑俗平凡ではあるが、これ無くしては彼等の生活行為の目的が達せられなかつた」と、その形や技法がよし稚拙であり平俗であらうとも、永い傳統の積分として示現された簡素な且實用的効果的な山の生活技術を表徴する山の民具への注意は大いになされていゝ」ことを述べ、山の民具の一例として背負梯子に就いて簡単な記述を行つたのであつたが、此の度は同じく背負運搬具である背負囊について紹介の筆を進めてみたいと思ふ。

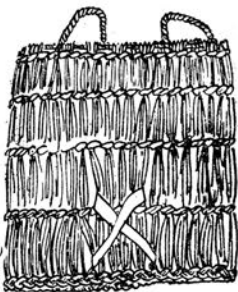
一
背負囊の主要部分は荷物を容れるための囊狀の容器で、此の部分は普通植物纖維で編み或は組まれであるが、組織材料が弾性に富む竹等の場合には、形成された容器は囊狀の形をとらないで、所謂籠の形態を具へることとなり、此の場合、背負籠といふ別な範疇に屬



第1圖 コシゴ
島縣比婆郡八針村
（材料 蒲）



第2圖 テゴ
新瀉縣船郡栗村
（材料 カツラ）



第3圖 セゴ
岐阜縣惠那郡三濃村
（材料 藁）

扱、製作材料であるが、夫々その地方の植物に關係を持つてゐることは云ふまでもない。そして此のことは直ちにその地方の地域性を表現する地表現象として認められる點に材料觀察の意義があること云へよう。例へば茨城縣久慈郡黒澤村上郷のビ

國に使用されつゝある背負囊の製作材料の概観が出来るであらう。材料は布類は別として、その取扱

する運搬具となつて來る。實は現在我國に存在する背負囊の中にも背負籠と分離出來難い形態を具へるものもあるのであるが、此處では一應竹以外の比較的フレキシブルな材料で編み或は組まれたもので、主體の容器が扁平な矩形の形をとり、且囊と名付ける以上、容器その物もフレキシブルであるものを指すこととする。

次に私のノートにある資料から組成材料を列記すれば、藁、蒲、スゲグサ、イワシバ、海草、檜の皮、樺の皮、マンダの皮、マダグ

クなる背負囊の材料は此の地方でいふイワシバなる草を蔭干にしたるものであり、長野縣南佐久郡川上村梓山並に秋山の部落で用ふるシヨイズカリと呼ばれる背負囊の材料は、此の地方の山地の溪谷に生育するスゲグサと稱する雜草なのである。

ひ方を次の四つの手法に分ける、とが出来る。

(A) 藁とか干草とかをそのまゝ用ひて藁状に編む。

(B) 藁、干草を一應繩に綯ひて後、その繩を編んで藁状を作る
(C) 樹木の表皮或は樹身を薄板紐状に削いで之を組んで藁状を作る。

(D) 藁類をそのまゝ編み或は組みて藁状を作る。藁の組織は(一)編みと、(二)組みとの二つに分けられる。

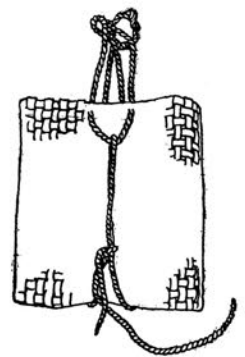
組織と材料との間には極めて緊密な關係あることは勿論で、寧ろ材料によりてその組織が決まるといふことが出来る。

藁の大きさは普通一辺四〇釐内外の矩形型が多い。

背負ふためには二ナ、ニカワ、オヒヤなどと呼ばれる負繩が、藁部に設けられた乳或は耳を通して用ひられる。その長さの調節は背負つてから胸や脇の下でやれる様になつてゐる。負繩の材料は麻、藁ミゴ等が用ひられてゐる。

二

運搬の對象は背負梯子に比して重量も體積も比較的小なる物體で、マサカリ、鋸、手鋸口、ヤ等の杓人樵夫の山道具をはじめ、ワツバなどと呼ばれる曲物の辨當入、狩人達の道具など定つてはあ



第4圖 ネコザ
愛知縣北設樂郡下川村
(材料 檜)

陸、東北の各地方に廣い分布を持つ稱呼で、即ち宮崎、熊本、廣島、岐阜、福井、石川、新潟、山形に互り、背負藁の稱呼では優勢なものゝ一つである。テゴの領域廣く、テゴは劣勢である。ネコザ、ネコダは四國、中部、北陸に領域を有する優勢稱呼であ



第5圖 ネコザを負ふ人

ビクは關東地方一部に勢力を持つ稱呼である。即ち茨城、栃木、群馬に互り可成りの使用領域を有つ。カリ、カリ、カレイは九州地方に發見出来る稱呼である。カルフは背負ふといふ九州方言である。鹿兒島縣肝屬郡のカマイ、富山縣下新川郡、石川縣鳳至郡のカマリ、宮崎縣西臼杵郡のツマカマリ、鳥取縣八頭郡のカンカリ、カンガルも此の系統の種呼と思はれる。

四

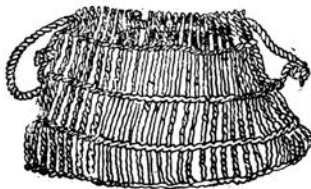
背負藁の使用領域は廣く全國に擴つてゐると云つてよい。特に貨負運搬なる運搬形式が起伏量の多い地形に適用される建前から、當然此の背負藁の分布領域が山地に偏することゝなつてけるが、同じ背負運搬具の背負梯子と比較する時、二三の除外例はあるが、その山地性が著しく眼につくのである。

背負梯子が山岳地帯に濃厚な使用領域を持つ一面、平野村、海村にも領域を有するに對し、此の背負藁は平野村、海村に於ける使用領域は等しく尠いことは一つの特徴と見做し得る。

五

現在使用されつゝあるルツクサツクはアルプス地方の獵師達の使用する獵袋から發達したといふことであるが、わが背負藁も獵具である例の相當あることは注意を惹く。

極めて貧しい資料であるが、アイメのサラニツプ、朝鮮のマンゲテ、臺灣番人も所謂首袋と呼ばれる麻糸編みの背負藁を有してゐる。わが民族を繞る隣接民族の所有する背負藁の例としてこれだけを附記して置く。



第6圖 Mangte
朝鮮慶尙北道漆谷郡石積面
(材料 藁繩)

私が記録してゐる背負藁の稱呼は五十餘種を數へることが出来る。今、その主なるものに就いて述べてみる。

テゴ、テングは九州、中國、北

る。即ち高知、岐阜、富山、愛知、長野に擴り、特に岐阜、愛知、東北、長野西部の分布濃度は大きい。ネコと略稱される場合も稀にある。コシゴは劣勢ではあるが中國、及び中部に擴がりを持つ稱呼である。即ち廣島、島根、靜岡、長野及び新潟に見出される。

コダシ、コダスは東北地方に優勢な稱呼で、特に青森、秋田、岩手では支配的な呼名と云へる。東北北部の代表名と言ひ得るであらう

ニダラ、ニンダラは靜岡縣及秋田縣に分布する呼名で、恐らく倭といふ語に關係ある語であらう。此のタラ系に屬すると思はれる稱呼には、秋田縣由利郡のコダラ同縣雄勝郡のヨコダラ、靜岡縣加茂郡のシヨイナダラ、愛知縣渥美郡のナダラ、ナワダラ、遠く佐賀縣山城郡のヒンメシヒヤトドラなどを數へることが出来る。此の外、イジミ(滋賀縣、石川縣)、シヨイヅカリ、ヤヅカリ(長

圖書



紹介

「極地集誌」

明文堂刊 B 六版
二八〇頁 定價二圓

近來國防的な意味と文化的見地から北方への一般的關心が昂まつて、北方に關する本が相當に出版されてゐる。その中では最近に科學工業主義社から刊行された「カブルーナ」と題する極地旅行記は面白いものである。原著者はハンサンといふ佛人で、カナダの北のキング・ウイリアム・ランドといふ小島で一年間エスキモーと暮した経験の記録である。この翻譯書に續いて、加納一郎氏の「極地集誌」が出版された。著者は北大在學當時から今日迄、二十年來「氷と雪」の世界の眞摯な探究家であることは周知の通りである。本書は研究といふほど堅苦しい内容のものではなく、スコット、ワトキン

ス、アムンゼンその他の極地探検の様子を隨筆風に紹介した文章の集成である。色々の機會に書かれたものを集めたのであるから一貫した筋書をもつてゐる譯ではないが、それだけにまた氣樂に面白く讀め、一讀して兩極地方に關する一般的な事情が解るところからみれば、あへて

尙本書には「リットル・アメリカ」からつたバード少將の肖像を載せてあるが、バード少將の南極探検については餘り書かれてゐない。最も大規模に行はれた極地探検といふ意味でも、バードの探検を本誌が何かで紹介して下さることを著者にお願ひしたく思ふ。

(伊藤秀五郎記)

二

著者が、今は廢刊になつたケルン誌に據つて「極地語彙」欄を設け、兩極探検の事情と思想を啓發し鼓吹して來たのは、既に十年來の久しい間であつた。

安心して讀めるといふことは、むしろ其の著書の内容に對するよりは、新著以前に於ける著者の經歷と活動とにある。かういふ意味で本書はその内容をひもどく前に、その標題と著者の名を聞いただけで先づ安心して、やうである。

巻頭の「探検家の育成」に於て極地に對する著者の識見は遺憾なく、從つてこの文章なくして本書の意義はない。

南極飛行に名聲を馳せたエルスワースは長い間極地への野望ならず、四十五才にして始めてアムンゼンと手を握つたと述べられてゐる。當國にも四十五才のエルスワース出でよ。さしあたり此の著者

あたりに一役買つてもらはねばならないことにならうが、著者が單なる極地ジャアナリストに了らざらんことの希はれるのは、せいぜい茲十年間位のものであらうことを考えると、今の時勢とにらみ合せて甚だ心細い次第であると言はねばならない。

兩極に對する溢れるやうな著者の情熱と關心とが、B 六版二八〇頁の「極地集誌」を成さしめたのであつて、更に時を新にして第二の極地集誌なり極地研究なりを成されんことを期待したい。

登山や探検の仕方が機械化の一途を辿つてゐる今日、最も尖端的とも思はれるウイルクシスの潛航艇による北極探検などの事情も今少し詳細に解説されて慇懃かつたやうに思ふ。

(織内信彦記)

關口泰氏著

「山湖隨筆」

を手にして

一五×二一、總頁二七八、口繪及挿入寫眞七、昭和十六年十月十五日那珂書店より初版發行、定價二・八〇、題簽日下部道壽氏、裝幀足立源一郎氏。

本書の奥付裏面で見ると、著者の著作は「山頂漫歩」「高千穂」外三帙あるやうだが、筆者は不幸に

して其れ等を手にする機會が無かつた。

然し關口泰氏の名を記憶したのは筆者の登山少年時代であつた。

山岳八年二號(大正二年八月)に同氏が寄稿された「赤城山の冬」一篇は、穂高や大井川奥山の記事と等しく、但し別な意味を以て、如何に魅力の満ちたものであつたであらう。赤城に關して關口氏が當時既に旅行見聞以上の深い理解と廣い知識を持つてゐられた事は、其の隨筆以外に「傳説及舊記に現れたる赤城山」を山岳七年二號(明治四十五年七月)に物されてある事によつても分明である。

「山」といつても、湖といつても一番先に頭に浮ぶのは赤城山である。赤城は高等學校の學生の時分から行きはじめ三十何年といふもの、……二、三年の外は毎年登つてゐるのだから、もう百回位は往復してゐるのであらう。……一年中のいつ頃が一番いいだらうと聞かれると、實は一年中いつでもいいと云ひたいのだが、聞いた人に失禮だから、早春と晩秋かなあと答へておく。」

右は本書の冒頭篇の初めの句だが、恐らく著者の風格を示し得て餘りあるものであらう。

流石に本書を繕いて行くと、冒頭篇や、山は赤城、河は利根、赤

城大沼(歌)、冬の赤城山は、元より、樹の芽草の實、食べものの話早春の山、冬山見聞記、雪艇初歩(歌)、「山の組曲」序、山の追憶(スキス日記とハイランドの紹介)の諸篇隨所に赤城が顔を出す。

其の他過半は我が黨關係の題目で、右の外に、瀑、松花江と鏡泊湖、臺灣の日月潭、新高登山の記憶、朝鮮風景、紅葉と新緑と温泉北海道の温泉、水源の魅力、山岳初夏(歌)、乗鞍岳の初夏、野麥の峠と村、低山と峠、高千穂峽、夢窓國師と富士山、一本杖の頃、瑞西の夏、北歐峽巡航記等があり著者の國土自然愛好の程と教養、趣味性の豊かさを知るが、何かしら昔々の魅力を感じしなかつたのは、或は隨筆の隨筆たる所以であらうか。

勿論筆者とても本書中の史記や、神祇論や、美學小品や、畫家傳、名僧傳を人一倍好んで讀んだ但、本書を本會の機關で拜見する時、是れは二つの書物に分けて、其の一つにもつと山と湖、赤城の種々相を盛つたならば、著者ならではの素晴らしい本が生れたであらう事を考へたと申し上げる失禮を許していただきたい。

(沼井鐵太郎)

The Everlasting Hills

J. waller 著
William Black wood & Sons L'd 發行
1939年

『一般的にヒマラヤの登攀は超人的な人々へのみ可能な如き印象が持たれてゐる。そして最近續々出版された立派な遠征の報告書は益々この考へを強めさせてゐる。併し私は、その様な傾向が終には山へ行く機會のある人々をすらすら止めてしまふ悪い結果を生むものであると考へる。』と序文に書き、更に結びの章では再び『大遠征隊を派遣するには費用がかさむ。そして果して新聞その他で騒いだだけの効果を擧げてゐるだらうか。エベレストに五回、ナンガ・パルバットに三回、その犠牲は幾何であつたか。カラコラムへのフランスや國際遠征隊はどれだけの成果をあげたか。それにひきかへて、カメツトに登つたスマイスの一行、ナンダ・デビで成功した米英合同隊、カブルを究めたクック、チヨロモラリなものしたチャップマン、そしてあのパウワーの仲間のカンチエンジュンカ山塊の敢闘

振り、さてはK2でのアメリカ隊の働きはどうであるか。』

これが本書の主旨である。そして著者は自身の経験から之を證明しようとしたのである。印度軍に屬してゐた彼は、アルプスを知る前に、はやヒマラヤに親んでゐた彼が正式に登山技術なるものを修得したのは既にカラコラムのK36で名をなした後であり、英國山岳會會員に推薦されたのも漸くその頃である。故にヒマラヤ恐るべからずと彼はいふ。

登攀の記録は既にヒマラヤン・ジャーナルで馴じみのものであるし、マシエルブルムのそれは當會報80號にも紹介されてゐる。併しかうした赫々たる成果が若輩僅か廿一から廿七才の間に行はれたものであり、生れて初めての登山に初女峯コロホイ(カシミル地方)なる天候に恵まれてではあつたが登破したのであつた。その翌一九三四年には當時まだ山の経験では彼と大差ないJ・ハリソンを誘ひ、マシエルブルムへの計畫を建てた。雪線上で暮した事もない彼等が、いきなりこの山に向つたといふ所にやゝ無慚と思はれる節もないではない。併しその意氣たるや壯である。事情は異なるが、願ひて山岳部内でヒマラヤ行を盛に唱へた頃、自分に果して之だけを實行する勇

氣と決斷とがあつたらうか。彼の山に對する熱情は至る所にあふれてゐる。印度を封じられて臺灣に、北朝鮮に僅かに慰めを見出し、あつた我々に、まるでその優柔不斷を責めてゐるかの如き言葉すら見出されるのである。

會報111號の事務所便りにも書いてある様ないきさつで本書は入手されたのであるが、之が或ひは最後の洋書となつた様に、ヒマラヤが白人の獨占舞臺から大東亞に編入される時も遠くあるまい。その時こそ我々はハワイの戦果にも負けない輝かしい登山をなさねばならない。

終りに本書には六四葉の全頁の寫眞が挿入してあることを記して置かう。印刷術の爲かや、不鮮明なもの、多いのは誠に遺憾である。(吉阪隆正記)

「山岳」36年2號豫告

内 容

一、登山五十年 木暮理太郎
一、ラワン・カンチエンジュンカ抄譯 吉阪隆正
一、内蒙古の調査旅行(二) 宮崎武夫

一、極地法と明神岳 鈴木 信
一、綜説 高所に於ける人體の抵抗と順應及高山病 額田 敏

一、黒部の古道調査記

塚本 繁松

以上の内容で目下編輯中であります。一號が大變遅れましたので二號では是非年内にと考へて居りましたが印刷所の變更などありまして遂に越年してしまひ申訳ありませんが今年度内(三月)には上梓出来る豫定で居ります。(逸見記)



Salfore Kangriの東面

餘白雜題

諏訪多榮藏

山のことに關してものを書いてゐる人は、書くことが好きだから書いてゐるのだといつてよいと思ふ。おそらく山を職業としてゐる者は案内者を除いてはゐないだらう。だから山のことに口を糊してゐる者がない限り山のことについて書いても無責任でよいとはいへない。といふのは、そんな例はひろつてみれば、いくらでもあらうし、深く詮索してみれば數限りなくあるだらう。そういう私達自身も、大きなミスをしてゐることが間々あることだから、他人の過失や誤りを發見するためばかりに汲々とせよといふのではない。

美術雑誌「アトリエ」昭和十五年七月號（二〇七號）に江川和彦氏が「現代ドイツ繪畫とモルゲンターラー」といふ文を書いてゐるが、モルゲンターラーはドイツ人ではなくスイス人なのは同文にもあるからよいが、なんとハンス・モルゲンターラーと二度まで書いてゐることである。雑誌には十八面の圖版があるが、これからおして、この原本はワイツシャー

版のもので、ヘルマン・ヘッセが序文と紹介を書いてゐるものらしい。

それならばエルンスト・モルゲンターラーに外ならないし、私も一度三越の書棚でハンスの肖像を樂しみながら眺めたことがある。ハンスが *Ich Seh' sie* のなかで「お前の叔父さんのあの畫家がいつもいつてゐた……」(S. 118) の畫家がエルンストだらう。ヘッセとハンスとの交友もつまびらかに知らないが、ハンスの *MATAHAI* をヘッセが激賞してゐる。これ以上の深い詮索はやめて、なぐ、もう一つハンスについて氣づいたことを書かう。

ハンス・モルゲンターラーを略して H.A.M.O. と彼自身は多少、侮蔑的に書いてゐるが、友人間では敬・愛稱となつてゐたであらう。我々が山に關してハ・モと書いたら、彼のことだと領けるが、單にハ・モと略してしまつて、アルファベット四文字だけでは、同名の人がゐるのを忘れてはならない。因にローター書店のカタログには *Hans Molenhauer, Der Morgen Gedichte*、といふ本がある。山岳書肆のことであるし、ただしがきに詩集とまであるのだから、彼も略せばハ・モである。かうなつてくると心配だからレクラ

A のパアルテルスの世界文學の姓名索引を見ると *Hans von Molot* といふ人が見つかる。いよいよハ・モが三人もふえてきてしまつた。ハンマプトンの辭典でも引かうものならまだ出てくるかも知れないし、これでは際限がないから、後日にゆづるとしよう。



信通員會

部隊から

横山 直介

・・・至極元氣にて、故郷の山々を眺めつゝ暮して居ります。北陸の山々も大分白くなつて來ました。高等學校時代の山の生活等時々想出して懐しく感じて居ます。山と自分の生活は何處に於てもいつまでも結びついてゐる様です。

高湯温泉にて

沼井鐵太郎

廿一日の夜から蔵王に來てゐます。蔵王小屋は一般人使用を許さず(〇〇にて)。ドッコ河畔の「山の家」は相當立派なものです。今年は流石外國人は一人も居ない様です。山越えの機會を待つてゐます。

山岳部欄

伯耆大山報告

九州醫專山岳部

九州醫專山岳部は伯耆大山に於て、元谷、屏風岩下にて、昭和十六年二月二十五日より昭和十七年一月二日に至る間米食を主とし、アルコールを燃料とせる幕營訓練を行へり。(參加者六名)

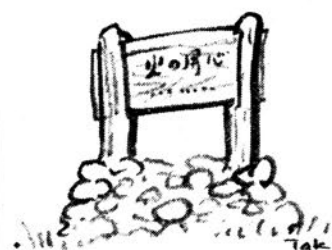
主なる消耗品を擧ぐれば、
食糧 米飯(一斗六升使用) 食パン(一五斤使用)

燃料 アルコール(五立使用) ガソリン(三立但し使用せず)

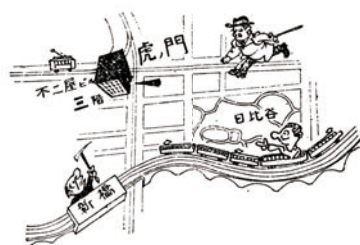
早、帝、立

三大學山の寫眞展

昭和十七年一月二十五日より30日にかけて銀座三越7階の會場にて約50點の山の寫眞の展示を行つた。



會務報告



終身會員ニ變更

永原輝雄（會員番號一六九三番
昭和十二年二月入會）。昭和十六
年度ヨリ終身會員ニ變更。

圖書寄贈

逗子八郎著「山征かば」

（中央公論社より）

北大スキー班「班報一號」

（北大スキー班より）

大阪商大山岳部「雪線第十七號」

（大阪商大山岳部より）

浦松佐美太郎著「たつた一人の山」

文藝春秋社

高須茂著「静かなる登攀」明文堂

（右藤島敏男氏より）

福田源一郎 岩瀬八雄共著

「冬山とスキーの旅」二見書房

（二見書房より）

中條徹道稿集「眞徹」非賣品

（中條銳一氏より）

雜誌類は紙面の關係にて省略。

役員會

12月11日18時 事務所にて開催

出席者—木暮、高頭、鳥山、横、

三田、沼井、藤島、中司、吉澤

交野、塚本、

委任—中村、木村、早川、武田、

角田、小島、田部、茨木、津田

高野、大島、額田、榎谷、三木

逸見、西堀、中原、福島、

議長、木暮理事

一、16年度會費追徴に關する件

（會計年度變更により16年度の

實際は15ヶ月となりたる爲）追

徴は行はず經費減額を圖る事。

一、終身會員の件—變更の事。

一、マチカ澤遭難問題—善處の事

一、講演と映画の會報告—切符賣

上高、所要經費につき塚本幹

事より報告ありたり。

一、入會申込者承認23名

尙青木、村尾兩幹事は轉任の爲辭

任せられた。

編輯後記

頁數削減のことなどでこの號は大變おくれましてしまいました。今までの16頁から急に半分になって、淋しく感じられることと思ひますが、地球の半分以上の水域地域にわたつての大戦争を行つてゐる今日、致し方ないことです。本土に空襲もなくかうして事業を續けることの出来るだけでも有難いといはねばなりません。

紙面の關係で大分原稿がはみ出てしまひましたが、追々のせて行きます。今までもさうでしたが今後ばますます量よりは質のいゝものにと力を注いで行かうと思ひます。(吉阪記)

昭和17年1月31日 印刷納本
昭和17年2月2日 發行

頒價二〇錢

日本山岳會内

編輯者 吉阪隆正

發行者 塚本繁松

東京市芝區平町二(不二屋ビル)

發行所 法人 日本山岳會

電話芝四三二一六四九

振替東京四八二九

東京市芝區今入町二十六番地

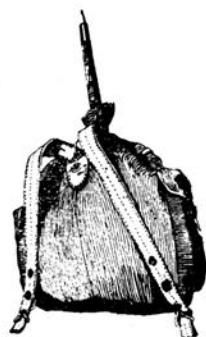
印刷者 鈴木和男

印刷所 株式會社 鈴木商店

オカモトヤ 印刷部

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

製布水防麻



キスリング型(E式)

ルックサック

★品質優秀責任保證★

布地見本適量

大型 二 尺 二七・六〇

中型 一尺八寸 二五・二〇

小型 一尺六寸五 二四・三六

●テルモス各種ハイキング用品

右は物品税二割を加へた改正値段です

御諒承下さい

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(三)三二一〇番
振替口座東京九一八四番

二六〇二年版・三圓八〇錢(送五錢)

山岳寫眞年鑑

本邦第一線のスキー、山岳寫眞作家の作品、數百點中より厳選した全卷スキー、雪山、岩峯溪谷、高原、山稜等四季の山岳美に飾られた豪華繪卷遂に完成!

堂々たる作家陣! 内田耕作・猪谷六合雄・塚本閔治・小垣外政一・岡田紅陽・佐藤淨・今井雄二・船越好文・風見武秀・清水長輝・飯山達雄・野島滋弘・百元好雄・穂刈三壽雄・瀧澤雪穂・柴崎高陽・清水武甲・齋藤金一郎・崎村正雄

サイズ・B5版、用紙・特漉ポストアート、映入豪華版、特色・全卷廿四枚のプレートになつてゐますから額に入れて半月毎に四季折の山岳景觀を變えながら觀賞出來ます。別冊・各作品の作者自身の執筆出來ます。データーを別冊として添附。

中村謙著 東京附近雪艇の旅

一圓六〇錢 (送一五錢)

山と溪谷社編 新しきスキーの山旅

二圓 (送一五錢)

塚本閔治著 日本のお山々

初版賣切中の處、再版二月發賣!

山と溪谷社編 山岳讀本

全六卷より成る山とスキーの綜合的登山讀本、愈々編輯開始! 陽春發賣・乞御期待

東京市芝區 山と溪谷社 振替東京
田村町六ノ四 六〇二四九